

フレンチトーストと君

君がフレンチトーストを作る、と言ったのは私が起きたタイミングのことだった。今日は日曜日。私も君もお休みだ。だからといってどこかに出かけようとかそういうことは考えなかった。そもそも私も君も外に出かけたがる人間では無かったからだ。ショッピングモールでデートをするよりも、一緒にゲームをしたい。そんな感じと言えばいいかな。面倒なだけじゃないか、と言えばそれまでだけれど。

ベッドから身体を起こして、カーテンを開ける。ご飯を作ることしか考えなかったのかな。まあ、それも君らしいといえれば君らしいけれど。そんなことを思って、私は寝室を後にした。

今の私の恰好は黒のノースリーブにパンツというとてもラフな恰好となっている。きつと君はこれを見たらせめて下を履いてくれ、というのかもしれないけれど、まあ、面倒なんだ。それくらい君だって知っているだろう？

顔を洗って、リビングへ。テレビは既に点いている。君は音の無い環境で作業をすることは嫌いだっただけからね。特にテレビ番組が好きなのではないのだけれど、ただ、我が家にはラジオが無い。

新聞を取りに外に出ようとして、私は下がパント一丁だったことを思い出した。仕方ないのでジーパンを履いてそのまま外に出た。まあ、ノースリーブでも別に大丈夫だろう。時刻は未だ朝の六時だ。休みだと分かっている、なぜだかいつもの時間に起きてしまう。……私もすっかり社会人としての悪い習慣が身についている。

私と君の家はマンションの三階にある。最寄り駅から十分もかかる、相場より少し安いマンションだった。とはいえ、徒歩五分圏内にコンビニエンスストアとドラッグストア、それにクリーニング屋まである。これだけでもかなり立地が良いように見えるかもしれないが、この前スパーが出来たことでさらにその立地は良くなった。しかも二十四時間。君はとても喜んでいた。料理を作るのが好きだったから、かもしれないが。

新聞を郵便ポストから取り出して、読み進めながらエレベーターに乗り込む。ちょうどそのタイミングで降りてきた学生と会釈を交わした。学生は日曜日も勉強か、或いは部活動だろうか。いずれにせよ、ご苦労なことだ。

新聞の見出しには、イギリスがEUを脱退するとか、任天堂が新しいゲームを発表するとか、

スマートフォンの新しい機種が発表されたとか、良いニュースと悪いニュースが上手い具合に配置されていた。

平和だな、と私は思ったけれど、まあ、新聞などそんなものだと思う。君は確か新聞やテレビのニュースを嫌っていたね。インターネットは良くも悪くも情報が早い。だからそのリアルタイム性が好きなんだ、って。分らないことではないけれど。確かに最近では地震が起きてもテレビよりもツイッターのほうが早いし、それ以外のニュースでもインターネットのメディアが数倍早く情報を伝えてくれることもある。

けれど私はスマートフォンをあまり使い慣れていないこともあって……結局、それが出来ずじまいだった。スマートフォンを持っていても、ツイッターをようやく使うようになったくらい。それでも連絡はメールや電話じゃなくてライン

というのが未だに慣れない。別に電話やメールでいいじゃないか、と思うかもしれないけれど。絵文字が無くて不愛想ですね、ってことを会社で言われるけれどそんなこと知ったことか、と思う。会社の人との会話に、絵文字が必要か？そんなことを私は君に言ったよね。そのとき君は確か、時代の流れには逆らえないよ、と言っていたっけ。別に逆らうつもりはないのだけれど。家に入り、コーヒーを入れて、私は新聞を読む。香ばしい香りが漂ってくる。フレンチトーストを焼いているのだろう。ともなれば、もうすぐだ。もうすぐ、私のフレンチトーストが、君の作ったフレンチトーストがやってくる――。



「PTSD？」

「……心的外傷後ストレス障害、とでも言えばまだ理解が早いでしょうか」

白衣を着た医者は、そう言って椅子を回転させる。

彼と向き合って話をしているのは、五十年代後半とみられる女性だった。女性は娘の事が心配になっているようだった。

「患者さんの恋人が……一か月前に亡くなられた、ということでしたよね。しかも、事故によって」

こくり。ゆっくりとその女性は頷いた。

患者さん、というのは彼女の娘のことだった。

「身体の傷は大したものではありません。こんなことを医者が言うのはどうかと思いますがね

……いずれにせよ、身体の傷だけを見れば大したことはありません。問題は、心の傷です」

「心の……傷」

「彼女は、自分の命の危機だけではなく、目の前で恋人を失っています。それが彼女にとって強いストレスとなったのでしょう」



廊下からガラス張りになっている病室がある。

そこには一人の女性が、檻に囚われていた。

その檻には、彼女の恋人と、幸せに暮らしている環境。

今の彼女にとっては、その檻の中こそが、幸せなのかもしれない。

彼女の主治医は、彼女を治すと言いながらも、そう診察を締めくくった。